

名取禮二先生と慈恵大学

栗 原 敏

東京慈恵会医科大学
学長・細胞生理学講座教授

DR. REIJI NATORI AND THE JIKEI UNIVERSITY

Satoshi KURIHARA

President

Professor of Department of Cell Physiology, The Jikei University School of Medicine

Dr. Reiji Natori (Emeritus President, The Jikei University School of Medicine) passed away on November 20, 2006, at the age of 94 years. He created the skinned skeletal muscle fiber preparation in 1949. The skinned fiber has been used all over the world to investigate the functions of contractile elements and internal membrane systems (transverse tubular system and sarcoplasmic reticulum).

Dr. Natori's work as a muscle physiologist was outstanding. He also served as the president of The Jikei University School of Medicine and the Director of the Board of The Jikei University (*Gakkouhoujin Jikei Daigaku*). He made great contributions to The Jikei University. His performance outside our university was also outstanding. In this article, I summarize his work and contributions to The Jikei University and also describe his activities outside the university.

(Tokyo Jikeikai Medical Journal 2008 ; 123 : 263-70)

I. はじめに

名取禮二名誉学長は平成18年11月20日、95歳を目前にご逝去なされた。先生のご逝去を悼み、また、先生のご業績を振り返り、平成19年12月15日の“筋生理の集い”（東京慈恵会医科大学・学外共同研究費の援助を受けた）では、名取先生に関する講演を企画した。先生が“skinned fiber”を創製された経緯と先生の哲学、“skinned fiber”が筋の研究に与えたインパクト、先生の思い出などは他稿で詳述されているので、本稿では名取先生が、教育と研究、そして大学運営にその生涯を捧げた学校法人慈恵大学と先生についてまとめた。なお、本稿の一部は先生の研究業績などの稿

と重複することをお断りする。

II. 生理学教授への道

名取禮二先生は昭和11年に東京慈恵会医科大学を卒業し、直ちに浦本政三郎教授の生理学教室に助手として入室した。名取先生が生理学教室に入室した当初は、鯉の呼吸中枢や末梢神経の活動電位に関する研究に打ち込んでいたが、骨格筋の活動電位を調べているうちに筋収縮に興味を持ち、筋生理学の道に入った。先生は昭和14年に講師に昇格、昭和16年に医学博士を受領した。昭和20年には助教授に昇格した¹⁾⁻³⁾。

当時の生理学教室は浦本教授が主宰していた。浦本教授の考えで、生理学は二講座が必要であるとの考えから、昭和20年、第二次世界大戦の最中に二講座制になり、杉本良一教授が第二生理学教室を主宰することになった¹⁾²⁾。しかし、部屋がな

平成19年12月15日、学外共同研究“筋生理の集い”研究集会での名取禮二先生追悼記念講演会における講演内容

かったので大学後棟の二部屋を使って第二生理学教室が発足した。その後、昭和24年6月20日付で、浦本教授の後任として名取禮二助教授が第一生理学講座担当教授に選任された。名取教授誕生後、名取先生と杉本先生の間で話し合いがもたれ、第一生理からは酒井敏夫助手（現、名誉教授）が、第二生理からは小川新吉助手が同席した。名取禮二教授の一声で、二階は第一生理、一階は第二生理と決まり、それぞれの教室が独立した教育・研究体制ができたのである。この時の名取先生の決断は実にみごとであったと言われている⁴⁾。

昭和24年（1949年）は、先生が教授に昇格し、第一生理学教室を主宰するという大きな節目の年となったが、先生の研究史の上でも大きな変革の時であった。この年の初春に、顕微鏡下で機械油に浸漬した一本の筋線維を分離して細胞膜を剥離し、筋原線維の構造を剥離前と同じように保持したままで分離することに成功した。これが“名取の skinned fiber”である。このように、昭和24年は先生にとって記念すべき年となった。その年の前後から、日本医科大学の戸塚武彦教授らと生理学に関する懇話会を開催するようになり、これが後の“筋生理の集い”として発展し、筋生理学の研究発表を重要な場となって、以後、毎年のように開催されている。また、先生はこの年に日本体力医学会設立に奔走し、日本の体力科学発展のための礎石が作られた。

昭和24年4月12日における私立学校法の公布によって、大学組織の変革が行われた¹⁾。昭和26年、財団法人・東京慈恵会医科大学は学校法人慈恵大学に改められ、同法人が東京慈恵会医科大学を運営することになった。それに伴って理事、監事、評議員の改選が行われ、名取先生は理事に就任し、昭和33年までの間、戦後、混乱していた大学の復興に努めた。昭和26年は、それまでの研究の成果を、“筋生理学”として丸善から出版し、この著書の中でスキンドファイバーを紹介し、当時、筋生理学者に多くの示唆を与えた。昭和28年には英国ケンブリッジ大学の筋生化学者SV Perry教授が来日し（ラグビーチームの監督として来日）、名取先生を訪問し、その折に、スキンドファイバーを供覧した。Perry教授は帰国後、Andrew F Huxley教授（神経の興奮のメカニズムの解明で

ノーベル賞受賞）に、スキンドファイバーについて報告したようだ。また、昭和29年には、本学が発刊する英文雑誌 Jikeikai Medical Journal 第1巻にスキンドファイバーに関する論文を3編発表した。この英文論文によってスキンドファイバーが広く外国の研究者にも知られるようになった。

その後、名取先生は昭和44年には学校法人慈恵大学の理事に再び就任し⁵⁾、平成5年まで理事を務めることになったが、昭和50年は名取先生にとって、また大きな変革の年となった。

III. 東京慈恵会医科大学学長・理事長として

本学の第6代学長・樋口一成先生は、昭和50年8月8日、慈恵100年記念事業準備委員会・第一回総会に出席し、多数の同窓の前でこの事業を成功させるという強い意思を示された。今でも先生が段上で、大学発展のための固い決意を述べた光景を思い出す。しかし、当日、いつもの樋口先生とは何か違う雰囲気が漂っていた。その後、樋口先生は8月12日に本学附属病院に入院し、8月26日急逝された。大学にとってまさに晴天の霹靂であった。私は夏季休暇をとっており教室を空けていたが、酒井先生から連絡があり急遽帰京したことを鮮明に記憶している。樋口先生は6月頃から体調不良を訴えており、この時すでに病魔が先生の体を蝕んでいたのである。大学は急遽8月27日に臨時理事会、次いで教授会、専門課程合同教授会を開催し、8月29日の合同教授会で名取禮二教授を学長代行に選定した。その後、9月19日の合同教授会において、名取先生を学長に選定し、故樋口一成学長の残任期間、学長を委ねることになった⁶⁾。大学は混乱することなく、名取禮二先生に全てを委ねることができたことは幸いであった。

9月30日には名取禮二学長就任式が、教職員、学生を集めて中央講堂で行われた。先生の話の題は“在るべき姿で為すべき仕事をなす”というものであった。医学教育の在るべき道の探求、医学生が医道に邁進すること、研究機関の合理化と施設の充足、慈恵大学の発展は自らの手で、ということについて、全学教職員、学生に話した⁸⁾。学長職に就かれてから先生は極めて多忙になり、好きな実験をする時間がなくなった。しかし、公務が

終わってから、あるいは公務の間の僅かな時間を見つけて、顕微鏡の前に座って skinned fiber を作成し実験に励んでいた。“1 オンスの経験は 1 トンの理論に勝る”という言葉が好きだった先生にとって⁷⁾、学長就任後、それまでと同じように実験することができなくなったことが、先生にとっては一番つらかったのではないかと推察する。戦後の窮乏を耐え忍んで大学の復興を目指し、全学が丸一となって努力してきた結果、大学の経営にも少し余裕がでてきたところで、樋口一成学長・理事長から名取禮二学長・理事長へと引き継がれた。樋口先生のご逝去によって、慈恵大学 100 年記念会会長は名取禮二先生に引き継がれ、その後の事業がつつがなく行われた(昭和 55 年 11 月 1 日、高松宮妃殿下のご臨席のもとに慈恵大学百年記念式と祝賀会が執り行われた)⁸⁾。

第 7 代東京慈恵会医科大学学長に就任された名取禮二先生は、“学内共同研究の推進”、“海外留学の奨励”、“標本館事業の拡充”を基本方針として、大学の改善・充実に努めた。昭和 50 年 11 月 10 日、名取先生は第一生理学講座担当教授の職を解かれることを要望して教授会で承認され⁹⁾、後任の選考を行うことになり、昭和 51 年 5 月 1 日付で増田允教授が第一生理学講座担当教授に就任し、名取先生は、学長・理事長職に専念することになった。しかし、先生は寸暇を惜しんで研究室に顔を出し実験していた。

昭和 52 年には、樋口体育館の中に体力医学研究室を設置し、本学の伝統である体力医学研究の振興を図った。この年に、“東京慈恵会医科大学学外研究員規程”を定め、大学の将来を担う人材を大学として海外留学させる制度を新設した。昭和 53 年には、学祖・高木兼寛先生が留学されたセント・トーマス病院医学校との交流を進めるために、セント・トーマス病院医学校のワイリー学長との間で文書を交換し、本学とセント・トーマス病院医学校が姉妹校となることが決まった。それを受けて、研究面でも協力するための準備が進められた。これ以後、本学とセント・トーマス病院医学校との間で、交換留学が始まった⁶⁾。また、学内の研究活性化を図るために学内共同研究費の制度をつくり、学内の研究を奨励した。臨床講座は診療が多忙で、研究する十分なゆとりがないことに配慮し

て、共同利用研究室を設置し(昭和 56 年 12 月 1 日、開設)、試料の微細形態学的、あるいは生化学的分析を委託できるようにし、臨床系教員の研究を支援する組織を作り、研究体制の基盤整備をした。これらは、それぞれ研究振興費、総合医科学研究センターへと発展して現在まで受け継がれている。この間、昭和 52 年 3 月 31 日付で、名取先生は定年で教授職を解かれ、同年 4 月 1 日付で名誉教授の称号が贈られた⁹⁾。

昭和 57 年 12 月、名取先生は教授会で、ご自身が次期学長に選出されることを固辞することを表明した。これを受けて、昭和 57 年 12 月 6 日の合同教授会で、大学は阿部正和教授を第 8 代学長に選任した。阿部正和教授は理事長に就任しないことを前提として学長を受けられることになった(本学の寄附行為では学長が選定されると、学長が理事長を兼務することになっており、必要がある場合には、学長とは別に理事長を定めることができる)。新理事会は名取禮二先生を理事長に選任し、新たな理事会体制ができた⁹⁾。また、名取先生に名誉学長の称号が贈られた。本学最初の名誉学長である。先生は引き続き、理事長として学校法人慈恵大学の運営に尽力することになったのである。

また、平成 4 年 12 月、岡村哲夫教授が第 9 代学長に選定された。阿部正和学長の就任時と同様、岡村哲夫学長は理事長を固辞され、阿部前学長が理事長を務めることになった(平成 4 年 12 月 25 日)¹⁰⁾。名取先生は終身顧問として、その後の大学運営に協力することになったのである。

IV. 名取禮二先生と社団法人・東京慈恵会

社団法人・東京慈恵会は明治 40 年(1907 年)に設立され、昭和 20 年(1945 年)まで、慈恵大学の主宰者であった¹¹⁾。慈恵会の設立と歴史は他書に詳述されているので、ここでは概略に留める。学祖・高木兼寛先生は医師育成のために成医会講習所を開設するとともに、施療病院を創りたいと考えた。この病院を開設するためには、当然、資金が必要であった。この病院の開設趣旨に賛同する有志が寄付をするとともに、日用品を供出するなどして有志共立東京病院が開設され、その創立委員会の総裁に有栖川宮威仁親王殿下を奉戴した。

その後、皇室からのご下賜金を賜るとともに多くの人々の善意による拠金によって病院が運営されていた。高木兼寛先生は恒久的に資金を調達できる方策を考えたが、英国に倣って、慈善病院の運営は皇室の援助によるのが最もよいと考え、華族婦人に病院の後援組織を作ってもらい、そこから皇族（皇后陛下）に働きかけるという計画のもとに、“婦人慈善会”が結成された（明治17年5月）。その後、皇后陛下を病院の総裁にお迎えすることになり、病院は東京慈恵医院と改名され、婦人慈善会は東京慈恵医院会と呼ばれるようになった。このような改組によって、民間からの寄付が増えゆとりがでてきたといわれている。しかし、ご下賜金は増額されたが寄付金は次第に減少するなど運営は楽ではなかった。特に、欧米の病院に比べて病院の規模や設備などが、必ずしも満足できる状態でないことを、有栖川宮威仁親王妃恵子殿下が憂慮され、病院の拡張を希望された。しかし、資金がなかったので、殿下は実業家の協力が必要と考え、渋沢栄一氏の協力を仰ぐことになった。渋沢氏の協力の下に、実業家や華族の協力を得て、明治40年7月19日、社団法人・東京慈恵会が発足し、会長に公爵徳川家達氏、副会長に男爵渋沢栄一氏が就任した¹¹⁾。

名取先生はこのような歴史と伝統のある社団法人東京慈恵会を重んじていた。先生は昭和51年4月21日に東京慈恵会の会長に就任され、その後、平成18年4月1日に名誉会長に就かれ、会長には徳川恒孝氏が就任した。

V. 名取禮二先生の学外における活動

1. 日本生理学会常任幹事

日本生理学会の運営は常任幹事会の意思決定によって行われており、常任幹事は各地区から選出されている。名取先生は昭和41年から昭和51年の間、常任幹事として学会の運営に尽力した。また、岡崎国立共同研究機構・生理学研究所（現、自然科学研究機構・生理学研究所）の開設にあたり協力した。日本生理学会に対する貢献が認められ、昭和57年、日本生理学会特別会員に推挙された。

2. 日本体力医学会理事長

名取先生はご自身の専門である筋生理学では“skinned fiber”を創製され、筋細胞を分析的視点

から研究した。他方、人間の体の機能は統合的な視点から研究することが大切で、このような統合的研究はそれにふさわしい研究手法を使うことが必要であり、分析的な研究よりもより困難であると仰っていた。先生は日本体力医学会の創設に奔走し、日本体力医学会の理事として学会発展のために尽力した（他稿を参照されたい）。先生は日本体力医学会の理事長に昭和41年に就任し、昭和54年まで学会の運営を主導した。また多くの功績によって、昭和62年には日本体力医学会名誉会長の称号が贈られた。

3. 全国医学部長病院長会議会長

国公立医科大学の医学部の学長・医学部長、それに病院長が一堂に会し、医学教育を始め、医学や医療に関する事柄について意見交換する組織が作られている。名取先生は昭和51年5月24日、全国医学部長病院長会議会長に就任し、医学・医療の諸問題に取り組んだ。

4. 日本私立医科大学協会会長

昭和29年頃から私立医科大学学長・病院長が一堂に会し、大学や病院の運営に関して共通の問題点を討議していたが、問題が山積したことから、昭和45年以来、医科大学が次々と新設されたことなどから、昭和47年8月に既設医科大学（医学部）13校によって正式に私学団体としての定款を作成して、組織を強化することが認められ、その後、成案を得て同年12月に東京慈恵会医科大学・樋口一成学長が初代の会長に選任された。現在、私立医科大学29校が日本私立医科大学協会に加盟している。昭和56年6月1日、名取先生は社団法人日本私立医科大学協会副会長に選任され、昭和58年5月26日には会長に就任し、昭和62年5月4日まで会長を務めた。その後、相談役となり協会の活動に協力した。

5. 日本学術会議副会長

昭和52年12月1日、第11期日本学術会議会員に当選し、この期の副会長を務めた。

6. 文部省保健体育審議会会長

先生は、文部省（現、文部科学省）の保健体育審議会の会長として、我が国の保健体育教育のあり方に指導的役割を果たした（昭和58年-62年）。先生は官からの信頼が篤く、我が国の将来を担う子ども達の保健と体育のあり方に高所から意見を

述べた。

7. 受賞・叙勲など

名取先生の学術的な貢献とともに、数多くの社会貢献によって、先生は各賞を受賞するとともに、勲章を受章し、また、文化功労者として顕彰されている。特に、先生は勲一等瑞宝章を受章されたことを大変喜ばれた。本学としては、高木兼寛先生、樋口一成先生についての勲一等の受章であった。この勲一等瑞宝章の受章は私立医科大学に籍をおいて、学術と社会への貢献が高く評価されたもので、私立医科大学関係者を大いに鼓舞した。

受賞、叙勲は以下の通りである。

昭和48年 紫綬褒章

昭和52年 朝日賞

昭和56年 日本学士院賞

文化功労者として顕彰

昭和61年 文化勲章

平成4年 勲一等瑞宝章

VI. 終わりに

名取禮二先生と学校法人慈恵大学との関係、また、それに関連した事柄についてまとめた。私は学生時代に名取禮二先生の講義を拝聴し、生命の仕組みを知るとともに、先生の生命哲学にも触れることができた。先生の講義は独特の口調で生命の不思議を淡々と語られた。名取先生は、現役教授時代、しばしば私の恩師酒井敏夫教授を訪ね、学問のことだけでなく、大学の運営に関わることなどについてよく話していた。名取先生は酒席をこよなく愛され、多くの方々と楽しんだ。その折に、お酒を飲みながら先生の話に耳を傾けていると、先生の考えをところどころに垣間見ることができた。生理学のこと、体力医学のこと、大学のあり方や運営に関すること、時としては経済や政治に関することなど、話は多方面に及び先生の博識と見識に感心させられた。

先生は戦後の混乱期を理事として大学運営に苦心された。学問的に重要な時期を迎えていた先生が、大学の経営に参画することになり、十分な研究時間を取ることが極めて困難な状態になった。しかし、寸暇を惜しんで研究を続けていた。午後5時を過ぎたら自分の時間として使わせて欲し

いといわれていたことを思い出す。その後、突然、樋口先生の後を引き継ぐことになったが、大学をみごとに先導された。慈恵大学が先生を必要としていたのである。また、全国医学部長病院長会議、日本私立医科大学協会、日本学術会議など、私立医科大学長として多方面にわたり指導力を発揮された。これらの活動は、私立医科大学に籍を置くものを励まし勇気付けた。

先生は体力医学に対しても深い考えがあり、ご自身はゴルフを楽しまれた。また、昭和31年-40年の間、本学サッカー部の第三代部長を務められ、平成17年(2005年)にサッカー部が創部100周年を迎えた時に、創部百周年記念誌にメッセージを寄せている¹²⁾。先生としての最後のメッセージであろう。それをここに紹介しておく。

サッカー部創部100年を記念して

東京慈恵会医科大学・名誉学長
元サッカー部・部長

名 取 禮 二

年の寿の素は今である。

今は時間であり、すばらしく続くことで時の流れをつくる。

一年・十年・百年・千年とどまることなく続く年を区切って考えるのに百年は寿としてよき区分になろう。

明治30年代に発足したと聞いている慈恵医大サッカー部は、正に創部100年(寿年)を迎えた。

歩み来たった歴史が、自ら一つの風格をつくり上げた。

茲に先輩各位の努力に心から感謝し、相共に明日を思い、力強く歩みを重ねたい。

先生は体が具合悪くなる直前まで、東京慈恵会・会長室に週一度は必ず顔を出された。阿部正和先生の発案で、先生が書かれたものを集め、“康寧を求めて”を刊行するお手伝いをする事になったが、90歳を超えてからもワープロを使い文章を書いていた先生は、まさに超人的であった。常に、学問を愛し、大学を考えて下さった先生に敬意と哀悼の意を表する。

本稿を書くにあたり、阿部正和元学長、酒井敏夫名

誉教授，小森亮顧問から助言を頂いた。深甚の謝意を表する。

文 献

- 1) 東京慈恵会医科大学。東京慈恵会医科大学八十五年史。東京：東京慈恵会医科大学；1965.
- 2) 東京慈恵会医科大学百年誌編纂委員会。東京慈恵会医科大学百年史。東京：東京慈恵会医科大学；1980.
- 3) 栗原 敏。名取禮二先生とスキンドファイバー，慈大新聞。2月25日号，2007.
- 4) 阿部正和。Annual Report No. 29（東京慈恵会医科大学生理学講座第2），2005.
- 5) 慈恵大学理事会 編。東京慈恵会医科大学記録(昭和34年-48年)。東京：東京慈恵会医科大学；1974.
- 6) 慈恵大学理事会 編。東京慈恵会医科大学記録(昭和48年-昭和55年)。東京：東京慈恵会医科大学；1981.
- 7) 名取禮二。名取禮二撰集 康寧を求めて：私の歩いてきた道。東京：東京慈恵会医科大学生理学講座；2003.
- 8) 慈恵大学理事会 編。東京慈恵会医科大学記録(昭和55年-昭和62年)。東京：東京慈恵会医科大学；1988.
- 9) 慈恵大学理事会 編。東京慈恵会医科大学記録(昭和62年-平成6年)。東京：東京慈恵会医科大学；1995.
- 10) 松田 誠。東京慈恵会医科大学の源流：高木兼寛の医学。東京：東京慈恵会医科大学；2008.
- 11) 名取禮二。東京慈恵会医科大学サッカー部・創部100周年記念誌。2005.

名取禮二先生経歴

文献7)より一部転載

1912（明治45）年1月2日 東京都出身

学 歴

昭和4年 3月25日	独逸学協会中学校卒業
昭和11年 3月25日	東京慈恵会医科大学卒業
昭和11年 5月12日	医籍登録（第81021号）
昭和16年 11月6日	医学博士の学位を授与される
平成5年 9月16日	日本体力医学会健康科学アドバイザー証（第1号）

職 歴

昭和11年 4月1日	東京慈恵会医科大学（生理学）助手
昭和14年 4月1日	東京慈恵会医科大学講師
昭和15年 8月10日	日本生理学会評議員
昭和17年 6月22日	鉄道医，鉄道省勤労科学研究所勤務 東京慈恵会医科大学講師兼任
昭和19年 6月21日～20年 4月30日	鉄道医官（高等官五等）
昭和20年 5月1日～24年 6月19日	東京慈恵会医科大学助教授
昭和23年 1月8日～平成4年 12月21日	学校法人慈恵会大学評議員
昭和24年 6月20日～52年 3月31日	東京慈恵会医科大学教授（第一生理学講座担当）
昭和24年 7月1日～57年 3月31日	日本体力医学会評議員・理事
昭和26年 3月10日～33年 12月22日	学校法人慈恵会大学理事
昭和26年 4月10日～35年 4月9日	日本生理学会常任幹事
昭和29年 9月3日～50年 12月19日	社団法人東京慈恵会監事

昭和35年 6月 1日～36年10月31日	文部省教育職（教授）東京教育大学体育学部 スポーツ研究施設
昭和37年 6月 1日～平成18年11月20日	財団法人明治生命厚生事業団理事
昭和41年 4月 1日～51年 3月31日	日本生理学会常任幹事
昭和41年 8月 1日～44年12月31日	アジアスポーツ医学会（ACFIMS）会長
昭和41年 4月 1日～54年 3月31日	日本体力医学会理事長
昭和44年 1月 1日～平成 5年 1月12日	学校法人慈恵大学理事
昭和46年 3月10日～平成13年 3月 9日	財団法人体育科学センター評議員
昭和47年 8月 1日～51年 7月31日	国際スポーツ医学会（FIMS）理事
昭和49年 1月 1日～61年10月31日	文部省教科用図書検定調査審議会第八部会長
昭和49年12月 1日～51年11月30日	日本学術振興会流動研究等審査会委員
昭和50年 1月20日～53年 1月19日	日本学術会議第十期第七部会員
昭和50年 9月19日～平成 5年 1月12日	学校法人慈恵大学理事長
昭和50年 9月19日～57年12月14日	東京慈恵会医科大学長
昭和50年10月 6日～平成 5年 2月18日	財団法人日本国際医学協会評議員
昭和51年 1月10日～59年10月31日	日本学術会議生物物理学研究連絡委員会委員
昭和51年 1月28日～53年 6月19日	日本学術会議生理科学研究連絡委員会委員
昭和51年 1月28日～53年 7月31日	日本学術会議心臓・血管研究連絡委員会委員
昭和51年 2月17日～53年10月22日	日本学術会議生理科学研究連絡委員会 体力分科会委員長
昭和51年 5月 1日～52年 5月21日	全国医学部長病院長会議会長
昭和51年 4月21日～平成18年11月20日	社団法人東京慈恵会会長
昭和52年 4月 1日	東京慈恵会医科大学名誉教授
昭和52年 4月 8日～60年 3月31日	財団法人日本体育協会スポーツ科学委員会委員
昭和52年 5月16日～56年 3月31日	文部省医学視学委員（大学局）
昭和52年 6月25日～56年 5月31日	生物科学総合研究機構生理学研究所評議員
昭和52年 7月 1日～54年 6月30日	文部省大学設置審議会委員（大学設置分科会）
昭和53年 1月20日～56年 1月19日	日本学術会議（第11期）会員
昭和53年 1月23日～56年 1月19日	日本学術会議（第11期）副会長
昭和53年 1月23日～56年 1月19日	日本学術会議運営審議会 付置財務委員会委員長（第11期）
昭和53年 3月 1日～56年 1月19日	日本学術振興会評議員
昭和53年 5月18日～56年 1月19日	日本学術会議運営審議会 付置国際会議主宰等検討委員会委員長（第11期）
昭和54年11月19日～61年10月31日	文部省教科用図書検定調査審議会会長
昭和54年11月19日～61年10月31日	文部省教科用図書検定調査分科会長
昭和55年 5月設立時より～平成 7年 5月	財団法人デサントスポーツ科学振興財団理事
昭和56年 6月 1日～58年 5月26日	財団法人日本私立医科大学協会副会長
昭和56年 6月 1日～平成元年 5月31日	岡崎国立共同研究機構評議員 岡崎国立共同研究機構生理学研究所評議員
昭和56年 8月 7日～62年 9月10日	文部省大学設置審議会委員（大学設置計画分科会）
昭和56年 8月16日～58年 8月15日	文部省医学視学委員（大学局）
昭和57年 3月31日	日本生理学会特別会員
昭和57年 4月 1日	日本体力医学会名誉会員
昭和57年 6月15日～58年 3月 9日	文部省保健体育審議会委員

昭和57年10月30日	日本宇宙航空環境医学会名誉会員
昭和57年12月27日	東京慈恵会医科大学名誉学長
昭和58年4月1日～平成3年5月10日	文部省保健体育審議会委員（学校体育文科審議会）
昭和58年4月1日～平成4年3月31日	財団法人国際科学技術財団評議員
昭和58年4月19日～平成4年3月31日	財団法人国際科学技術財団評議員会長
昭和58年4月25日～平成3年5月10日	文部省保健体育審議会会長
昭和58年5月26日～62年5月21日	財団法人日本私立医科大学協会会長
昭和58年8月31日	スパ白金顧問（株式会社） ダイヤモンド・アスレティックス
昭和58年12月6日～63年3月31日	文部省医学視学委員（大学局）
昭和59年5月1日～平成10年11月25日	ベルツ賞常任委員
昭和59年6月28日～昭和63年6月27日	国立遺伝学研究所評議員
昭和60年2月19日	上原記念生命科学財団理事
昭和61年2月21日	日本体育・学校保健センター設立委員
昭和61年10月17日	財団法人日本学術協力財団理事・評議員
昭和62年1月1日～平成17年3月31日	国立科学博物館評議会評議員
昭和62年4月31日～平成8年12月13日	全日本健康推進学校表彰会中央審査委員長
昭和62年5月21日～平成18年11月20日	財団法人日本私立医科大学協会相談役
昭和62年5月25日～平成5年5月24日	学校法人二階堂学園顧問
昭和62年10月7日	日本体力医学会名誉会長
昭和62年10月19日	日本医歯薬アカデミー会長
昭和63年3月25日	国立科学博物館評議員会議長
昭和63年12月12日	日本学士院会員
平成3年1月25日～平成5年1月24日	日本体育・学校健康センター 体育学校健康センター振興基金 スポーツ振興基金審査委員長
平成3年5月27日～平成7年3月31日	財団法人精神・神経科学振興財団会長
平成5年4月1日	財団法人日本学術協力財団専務理事
平成5年2月24日	財団法人日本国際医学協会名誉顧問
平成7年4月1日	財団法人精神科学振興財団顧問
平成7年4月18日	日本医歯薬アカデミー名誉会長
平成7年6月23日	財団法人日本学術協力財団会長

賞 罰

昭和19年8月1日	叙従六位
昭和48年11月7日	紫綬褒章を受章す
昭和52年1月19日	昭和51年度朝日賞を受賞す
昭和56年6月10日	日本学士院賞を受賞す
昭和56年11月4日	文化功労者として顕彰される
昭和61年11月3日	文化勲章を受章す
平成4年4月29日	勲一等瑞宝章を受章す
平成18年12月20日	叙従三位